

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12344

研究課題名（和文）チンパンジー・サンクチュアリにおける保全・保護概念形成と実践：シエラレオネの事例

研究課題名（英文）Conceptualizations and Practices of Chimpanzee Conservation and Protection at Chimpanzee Sanctuary: A Case Study from Sierra Leone

研究代表者

樺澤 麻美（KABASAWA, ASAMI）

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・特任助教

研究者番号：20865191

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：西アフリカのシエラレオネ国にあるタクガマ・チンパンジー・サンクチュアリは、1995年に設立され、違法なペット取引で孤児となったチンパンジーの保護と野生チンパンジーの保全を行なっている。本研究では文献調査とサンクチュアリでの参与観察を行い、サンクチュアリによる保護や保全の活動の資金や運営の主導が先進国、特に欧米に依存している一方で、現地職員は長年の外国人スタッフとのやり取りの中で、彼ら独自の飼育や保全に対する考えや取り組み方を培ってきたこと、また、非常時においては、現地職員や周辺コミュニティの理解と協力が活動の維持に不可欠であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

絶滅危惧種であるチンパンジーの保全・保護はアフリカの生息国各地で、主に欧米の資金や理念のもとに行われている。本研究によって、保全や保護に関わるアクターたちの多様な価値観が明らかになり、「絶滅危惧種の保全」「動物の生きる権利の保障」という支配的な価値観の下、野生動物の保護を一元的に訴えるのではなく、生息国（その多くが後発開発途上国）の反応や価値観を受容することの重要性が確認できたことは学術的な意義がある。この成果は、保全・保護の活動の実務者にとっても、協働する他者や働きかけの対象者を理解する上で有意義なものとなるであろう。

研究成果の概要（英文）：The Tacugama Chimpanzee Sanctuary, located in Sierra Leone in West Africa, was established in 1995 to protect and care for orphaned chimpanzees rescued from illegal pet trade and to conserve wild chimpanzee populations. This study conducted a literature review and participant observation at the sanctuary, revealing that while the funding and management leadership for the sanctuary's conservation activities are relying heavily on developed countries, particularly Western nations, local staff have developed their own perspectives and approaches towards care and conservation over years of interaction with foreign staff. Additionally, it highlighted the essential role of understanding and cooperation from the local staff and surrounding communities, particularly during emergencies, in maintaining the sanctuary's operations.

研究分野：地域研究

キーワード：チンパンジー シエラレオネ 野生動物保全 野生動物保護 動物観 チンパンジー・サンクチュアリ  
アフリカ 国際協働

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

シエラレオネはかつて、欧米及び日本を対象にしたチンパンジー輸出の拠点であり、乱獲により野生チンパンジーの生息数が激減した。同国のタクガマ・チンパンジー・サンクチュアリは内戦中の1995年にスリランカ人の篤志家が、違法なペット取引で孤児となったチンパンジーを保護飼育する目的で設立し、内戦やエボラ熱流行といった社会の危機的状況のなか、活動を続けてきた。また、野生チンパンジー保全の活動も全国各地で展開している。これら保護・保全の活動は主に外国からの資金によって支えられ、欧米からの活動家、ボランティアや研究者が運営や技術移転をおこなっている。このような中、「サンクチュアリの運営主体や活動が多国籍化・多元化していく中で、施設内で働く現地職員や外国人スタッフは、旧来の、あるいは周辺の地域住民のチンパンジー観とどのように折り合いをつけながら、サンクチュアリ内外における保護・保全活動を展開しているのか?」という問いに至った。

先行研究では、マレーシアのオランウータン・サンクチュアリにおける文化人類学研究 (Perreñas, 2018) があるが、アフリカに関しては、飼育下のチンパンジーを野生に帰すリイントロダクションの方法についての研究 (Humble et al., 2011) や、サンクチュアリの社会・経済・環境的影響を定量的に示した研究に限られてきた (Ferrie et al., 2014)。またこれら先行研究はいずれも「チンパンジーを含む大型類人猿の保護やその施設がどうあるべきか」という実務的側面に焦点を当ててきた。それに対し、本研究のように、「どのような人々がチンパンジー・サンクチュアリの活動に関わり、どのような考えを持っているか」について、その価値観や実践を当事者の観点から調査・考察した研究は前例がなかった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、「サンクチュアリの制度」、「サンクチュアリにおける保護・飼育の実践」、「動物・環境保全を巡る倫理感の形成」について、サンクチュアリでの参与観察とそこに関わる多様なアクターから聞き取りを通じて調査することである。チンパンジーを巡っては、「ペット」「保護・保全されるべき絶滅危惧種」「ヒトに近い動物」などの欧米から輸入された価値観と、「食材」「伝統医療及び呪術の材料」「害獣」というシエラレオネ在来の価値観がサンクチュアリという接触領域を通じて折衝・接合してきた。このような価値観の衝突や混交を前提としながら、保護・保全の活動を日々、実践する当事者に関する研究は、「絶滅危惧種の保全」「動物の生きる権利の保障」という支配的な価値観の下、野生動物の保護を一元的に訴えるのではなく、生息国 (その多くが開発途上国) の反応や価値観を受容するうえで、結果的には実務者にも有意義なものとなる。

## 3. 研究の方法

本研究はシエラレオネ国のタクガマ・チンパンジー・サンクチュアリを事例として扱い、文献調査とフィールドワークを行った。フィールドワークでは、ボランティアとしてサンクチュアリに住み込み、飼育活動の参与観察を行い、外国人スタッフ、現地職員、訪問客、周辺住民に聞き取りを実施した。また、野生動物保全・管理科のある現地大学や、サンクチュアリが保全活動を行っている Outamba Kilimi 国立公園、Loma Mountains 国立公園でも情報収集および聞き取りを行った。

当初、3年間の研究期間中に4回 (各回90日間) のフィールドワークを予定していたが、本研究の初年度である2020年度と2021年度は新型コロナウイルス感染流行のため渡航が不可能であった。そのため、サンクチュアリから既存のデータを取得し、オンラインでの聞き取りを実施した。2022年度と研究期間を延長した2023年度には、それぞれ3.5ヶ月間のフィールドワークを実施した。

## 4. 研究成果

上述の通り、本研究の問いは、「サンクチュアリの運営主体や活動が多国籍化・多元化していく中で、施設内で働く現地職員や外国人スタッフは、旧来の、あるいは周辺の地域住民の「チンパンジー観」とどのように折り合いをつけながら、サンクチュアリ内外における保護・保全活動を展開しているのか?」というものである。以下のように、サンクチュアリの制度と活動について整理し、各アクターによるチンパンジー保護・飼育の実践と動物・環境保全をめぐる倫理観の形成について明らかにした。

## (1) サンクチュアリの制度：タクガマ・チンパンジー・サンクチュアリの事例

タクガマ・チンパンジー・サンクチュアリは、1995年に首都フリータウンに近い保護地区内に個人の篤志家によって設立された。設立の背景には、違法なペット取引で孤児となったチンパンジーの保護があった。当初、設立者が保護した11個体を飼育していたが、年々その数は増加し、2024年3月時点で120個体が飼育されている。設立当初は無償で働く外国人職員が2人だけであったが、近年では運営マネージャー、保全マネージャー、獣医、メディアオフィサー等、常時7から9人の外国人が有償で雇用されている。外国人ボランティアの数は時期によって変動する。現地職員も設立当初の5人から、現在では55人が常勤として雇用されている。現地職員は主に周辺コミュニティから雇用されている。運営の主体であるマネージャーレベルは外国人で構成されているが、内戦(1991-2002)、エボラ出血熱の流行(2014)、新型コロナウイルス感染症の流行(2020-2021)といった非常時には、設立者と一部の外国人以外は帰国してしまうため、現地職員による特に飼育業務の継続がサンクチュアリの維持には必須であった。

タクガマは、野生チンパンジーの保全活動として、2010年に全国生息数調査を実施し、重要な生息地と確認されたOutamba Kilimi国立公園、Loma Mountain国立公園等で、コミュニティと現地政府の保護地区責任機関であるNational Protected Area Agencyと協力して、カメラトラップの設置やパトロールによる野生動物バイオモニタリングを実施している。また、コミュニティへの生業支援が行われており、今後、エコツーリズムの展開等も計画されている。サンクチュアリでは自然環境保全に関する啓蒙活動と資金確保のため、滞在用のエコロッジを設け、ガイド付きツアー、ヨガ・リトリートといったイベントを企画して、エコツーリズムに注力している。これまでにアメリカのTIME誌、コンデナスト・トラベラー誌他、欧米のメディアに取り上げられた。2019年にチンパンジーがシエラレオネのナショナル・アニマルに指定され、「観光の顔」として標榜されたことから、現地政府の観光・文化省とシエラレオネの観光促進を図っている。

タクガマはテレビ・ラジオ等のメディアや、サンクチュアリの公開、学校訪問、コミュニティアウトリーチ活動等により、チンパンジーを含む野生動物、自然環境保全に関する環境教育及び関連する法令に関する宣伝広報を行っている。しかしながら、チンパンジーの捕獲や保護地区内での森林伐採といった違法行為は続いており、地方の僻地の村落への情報の浸透や、保護指定動物の密猟・捕獲・所持、保護地区での森林伐採といった違法行為に対する罰則の実行と厳罰化、現地政府関連機関のガバナンスの強化が課題であることが判明した。

これらの活動の資金源は、事業・活動ごとに欧米の動物園、NGO、財団、政府機関の寄付や助成金によって賄われている。また、サンクチュアリの訪問客のための施設内と周辺保護地区のガイド付きツアー料、エコロッジ滞在費、海外からのボランティアや研究者からの参加費・研究費・滞在費、個人の寄付、グッズ販売等も運営の重要な資金源である。ただし、エボラ熱や新型コロナウイルス感染流行中はロックダウンのため、訪問客やボランティアを受け入れが制限され、海外からの寄付や助成金以外の収入が途絶えた。今後、サンクチュアリとして、観光以外にも収入源を確保することが課題である。

上記のように、タクガマ・サンクチュアリはチンパンジーの保護施設として設立されたが、過去30年間で規模が拡大し、現在ではシエラレオネの野生チンパンジーとその生息地の保全の拠点、さらに環境教育を促進する団体として活動が多岐にわたっていることが明らかになった。

## (2) チンパンジーの保護・飼育の実践

外国からの職員、インターン、ボランティア(以下、外国人スタッフ)は主にヨーロッパ、北・南米出身者が多く、霊長類学、獣医学、生物学、動物行動学、保全学などの学歴を持ち、「チンパンジー・大型類人猿・霊長類の飼育・管理」「アフリカでの生活・活動」「動物園とは異なるサンクチュアリという保護施設での飼育」といった、野生動物保全または獣医療分野でのキャリア形成あるいは自己実現のための経験を得るため、そして保護・保全といった活動に実際に参加し貢献することを目的としてタクガマで働いている。彼らは通常1、2年で離職あるいは帰国するが、その期間中、できるだけ多くのことを経験し、また掲げた目標を達成しようと試みる。一方、現地職員はタクガマ就職以前には野生動物の飼育、保護・保全に関する経験や学歴・知識はなく、「安定した職を得る」または「外国人がいる施設で働く」といった動機で、多くはタクガマの職員からの紹介で就業する。現地職員は何らかの理由で解雇されるか、他に条件が良い仕事が見つからない限り離職しない。動物園が身近にあり、野生動物、特に大型霊長類の飼育員といった職業が好意的に受け止められる先進国と異なり、現地職員及び周辺コミュニティの住民からは、チンパンジーの飼育は、糞の清掃、水や飼料の運搬、施設の維持のための土木作業を行う「肉体労働」と捉えられている。

シエラレオネには動物園や、飼育や獣医学を学べる教育機関はないため、タクガマ・サンクチュアリでのチンパンジーの飼育管理と獣医療に関する知識と実践は、主に先進国の動物園や

霊長類サンクチュアリで形成されたものが欧米からの獣医やボランティアにより導入されている。現地職員に対する技術や知識の移転を行うことは外国人スタッフの業務の一部として期待されている。現地職員は新しい技術や知識を学ぶことに意欲的であるが、導入された手法や技術が、時間、資材、人材の不足等の理由により定着しづらいこともある。例えば、エンリッチメントは先進国の飼育施設では、動物の福祉の観点から、日々の飼育業務の一部となっている。しかし、先進国のような電気・水道といった施設の維持・清掃に必要な社会インフラがなく、食餌のため固形飼料もないタクガマのような途上国の施設では、放飼場や屋内施設の清掃や維持管理、食餌の準備・保管といった最低限の飼育業務に多くの時間と労力が割かれている。また、先進国で行われているようなエンリッチメントを実施するための資材の入手が困難なこともある。長年同施設で飼育に携わってきた現地職員の中には、数年ごとに入れ替わる外国人スタッフから紹介される技術や知識に関して、一定の理解や興味を示すものの、自分達の経験に基づく飼育方法を変えることへの抵抗を感じる者もあり、衝突を避けながら導入された技術や知識を取捨選択していることがわかった。

現地職員のチンパンジーとの関係性には個人差があるが、彼らとの、あるいは彼ら同士の会話の中のチンパンジーに関する語りと外国人スタッフによる語りが多く共通している。サンクチュアリで働く動機、就業以前の経歴・学歴、保護・保全に対する価値観に依らず、飼育業務の中で醸成されたチンパンジーの行動に関する共通した認知や理解があり、また個体に対する愛着や関係性が築かれていることが判明した。

### (3) 動物・環境保全をめぐる倫理観の形成

外国人スタッフはタクガマに就業する以前に、チンパンジーを動物園などで観察または飼育した経験があり、アフリカにのみ生息する絶滅危惧種であることを知っている。現地職員やシエラレオネ出身の訪問客の中には、チンパンジー生息地のそばで生まれ育ち、チンパンジーに対して、「獣害・危険動物」「ブッシュ・ミート」「伝統医療の材料」といった実体験に基づくチンパンジー観を持つ者もいるが、中にはタクガマに来る前にチンパンジーを実際に見たことがない者、野生のチンパンジーはアフリカのみに生息していることや絶滅の危機に瀕していること、また「絶滅危惧種」の意味を知らない者もいた。外国人スタッフの中には、シエラレオネの伝統的なチンパンジーに対する価値観を否定的に捉え、環境教育や外国人スタッフが現地職員と友好的な関係を構築することで、この価値観を変えられると考えているものもいた。

2019年、シエラレオネ政府はチンパンジーをナショナル・アニマルとし、同国の新しい「観光の顔」と標榜した。また、2022年には、同国のパスポートの査証ページにチンパンジーを含む野生動物があしらわれた。これらの一連の事象をサンクチュアリは、シエラレオネに生息する貴重な野生動物としてのチンパンジーの認知度を高め、保全活動を進めるための好機と捉えた。しかし、シエラレオネの人々の間でチンパンジーは、その「強さ」や「賢さ」で知られている反面、一般的に「醜さ」の例えでも用いられる。現地の一部の人々からはSNS等で「醜いチンパンジーをパスポートにあしらうことで、アフリカ人に対する人種差別を助長する」「Sierra Leone（ポルトガル語で「ライオンの山」という意味）という国名から、ナショナル・アニマルは威厳のあるライオンにすべきだ」という声も聞かれた。一方で、チンパンジーがゴリラに並び、先進国でよく知られた人気のある動物であり、絶滅危惧種であることから、この選択は妥当であり、同国の自然環境全般の保全と、ウガンダやルワンダのゴリラトレッキングのような観光を促進する機会になるという声もあった。

アフリカの霊長類サンクチュアリの多くは、個体の保護を目的として設立され、現在では対象種と自然環境の保全に活動を広げている。本研究により、設立から約30年が経過したタクガマの事例から、関わるアクターの数が増加し、彼らの背景や動機も多様化していることが明らかになった。動物の保護や保全に関する価値観や動機はアクターによって異なる。外国人は、チンパンジーが感情を持つ保護されるべき動物であり、絶滅危惧種であるという理念から活動に参加している。現地職員は、タクガマで職に就いたことを契機に活動に参加し、経済的理由、職員同士の関係性、タクガマという団体に属する利点から継続している。ただし、これは彼らが飼育しているチンパンジーに対する愛着や、自然環境の保全に対する必要性を感じていないというわけではない。

サンクチュアリで活動する外国人スタッフは、自分たちの参加によって運営や飼育状況を改善したい、現地の人々の動物保護や保全に対する意識を変えたいという目的を持つ者が多い。数年で入れ替わる外国人スタッフの目的や理念に対し、現地職員たちは一定の共感を示し目的達成を助けることを、業務の一部と考え、自分達の経験に基づいた飼育方法に新しい技術や考えを取捨選択しながら活動を継続している。保護や保全の活動の資金や理念が先進国、特に欧米に依存している一方で、現地の人々は長年の外国人スタッフとのやり取りの中で、彼ら独自の飼育や保全に対する考えや取り組み方を培ってきたこと、また、非常時においては、現地職員や周辺コ

コミュニティの理解と協力が活動の維持に不可欠であることが、本研究で明らかになった。

<引用文献>

- Ferrie, G. M., K. H. Farmer, C.W. Kuhar, A. P. Grand, J. Sherman and T. L. Bettinger. (2014) The social, economic, and environmental contributions of Pan African Sanctuary Alliance primate sanctuaries in Africa. *Biodiversity Conservation*. 23:187-201.
- Humle, T., C. Colin, M. Laurans and E. Raballand. (2011) Group Release of Sanctuary Chimpanzees (*Pan troglodytes*) in the Haut Niger National Park, Guinea, West Africa: Ranging Patterns and Lessons So Far. *International Journal of Primatology*. 32:456-473
- Perreñas, J. S. (2018) *Decolonizing Extinction: The Work of Care in Orangutan Rehabilitation*. Duke University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 樺澤麻美
2. 発表標題 シエラレオネのチンパンジー：その利用と保全の歴史
3. 学会等名 日本霊長類学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樺澤麻美
2. 発表標題 シエラレオネのチンパンジー保全：過去と現在
3. 学会等名 「野生生物と社会」学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------